

【別紙】 令和4年度 学校自己評価重点目標シート (川口市立神根小学校)

(A4判横)

※学校関係者評価実施日とは、学校関係者評価委員会を開催し、学校自己評価を踏まえて評価を受けた日とする。

学校教育目標	心豊かに たくましく生きる 子どもの育成
目指す学校像	活力にあふれ 生き生きと輝く 魅力ある学校 ～すべては子どもたちのために～

達成度	A ほぼ達成(8割以上)
	B 概ね達成(6割以上)
	C 変化の兆し(4割以上)
	D 不十分(4割未満)

出席者	4名
学校関係者(教職員を除く)	11名
事務局(教職員)	3名

学 校 自 己 評 価					
領 域	学 度 目 標			年 度 評 価 (令和5年2月1日現在)	
	現状と課題	重点目標	具体的方策	重点目標の達成状況	達成度 次年度への課題と改善策
組織運営	若手教職員が増えていることから、主任層の育成と組織を生かした業務遂行が課題である。	○教職員一人一人の特性を生かし、まとまりと活力のある学校をつくる。 □目指す学校像の具現化のため、全職員の共通理解・共通行動体制を確立する。	○「先手必勝」を意識し、会議・協議の場の効率化と充実化を進める。 ○相談・連絡・報告の徹底。何事も後回しにしない意識を醸成する。 □目指す学校像及び、キャッチフレーズ「やる気と根気で夢をかなえる神根っ子」の共通理解・共通行動体制を確立す	○協議の内容を精選し、効率化が進んだ。(教職員評価A56%B35%計91%) 教職員の相連報、何事も後回しにせず、すぐに行動を起こす意識を醸成できた。(教職員評価A52%B44%計96%) □共通理解が進み、共通行動体制が整った。	A コロナ禍ではあるが、可能な範囲で教育活動を実施できた。行事等には、組織で対応し工夫して取り組んだ。今後は、行事の精選、会議の効率化、分掌の工夫を行い、改善をさらに進めていく。 B
教育課程	ICT端末をつかった授業での活用及び指導法の習得が課題である。 ○児童の学力向上のため、指導法や取組を学校全体で推進することを課題である。	○ICT端末を授業に積極的に活用し、児童の学力を伸ばす。 □児童の良さとやる気を伸ばし、学力向上をめざす。	○ICT端末(導入ソフト)が効果的に授業や家庭学習等で活用できるよう、学校全体で指導法の研究に取り組む。 □高学年の教科担任制、算数少人数、さくちゃん計算検定の実施により、一人一人の児童が伸びる授業を実践する。	○積極的で効果的な活用ができ、教職員、児童に浸透した。(保護者評価A58%B35%計93%) □基礎基本の定着に着目するのではなく視点を変え、学び合いを進めた。(保護者評価A18%B67%計85%) (教職員評価A74%B26%計100%)	A 基礎基本の定着を重視した学習から、基本問題と高いレベルの学習(ジャンプ問題への取組)を組み合わせて学習することで、全児童の学力を引き上げる実践を、2学期から取り組んでいる。まだ取り組み始めて日が浅いため(5か月)、成果はすぐには望めないが、児童のやる気が見られるようになってきているため、今後も継続していく。 B
開かれた学校づくり	○学校応援団に多大なご協力をいただいている。コロナ禍の中で、関係を切らすことなく、学校・保護者・地域との連携を一層強化・充実させていくことが課題である。	○学校における教育活動の意図について、様々な機会を通じて情報発信し、保護者、地域との信頼関係を高める。 □学校運営協議会において、地域と学校が連携・共同して、信頼される学校を目指す。	○HPの毎日更新、学校だより他各種たよりの発行により、学校での活動の様子を積極的に発信する。 ○PTA、おやじの会、学校応援団、地域等との交流をコロナ禍ではあるが可能な限り進める。 □学校運営協議会を年5回開催。学校や地域の状況等を共有し、地域とともにある学校を作り上げる。	○HPはほぼ毎日更新した。閲覧数は1日約280件。学校メール登録率100%。(保護者評価A43%B50%計93%) ○PTA、おやじの会、地域等によるクリーン活動を実施した。 □学校の状況および新たな取組等を説明し、出された意見について学校運営に取り入れた。	A 令和5年度に本校は150周年を迎える。150周年実行委員会を歴代PTA会長とともに立ち上げた。保護者、地域の方30名程のメンバーが協力を申し出てくれており、周年行事や企画を進めていく。 B
教職員の資質向上	○経験年数に応じた指導力向上が課題である。 □職員事故防止のため、教育公務員としての使命感・倫理感を醸成し続けることが求められる。	○ライフステージに応じた教職員の指導力を高め、学び続ける教師集団を育成する。 □県内、市内の教職員事故発生状況に鑑み、服務規律を厳正化する。	○校内研修や管理職による授業観察の機会を捉え、教職員の指導力を育成する。 ○中学校と合同で、学校改革「学びの共同体」に取り組む。 □倫理確立研修の定期的な実施。内容の工夫を行い、教職員に当事者意識を自覚させる。	○「学びの共同体」を教職員の共通理解のもと9月より本格的に進めた。グループ学習を中心に児童が聴き合う関係をつくる学習方法は、教師の同僚性を高めている。小中連携による「学びの共同体」を推進できた。(教職員評価A52%B48%計100%) □校長室だよりを随時発行し、倫理観、言語環境、保護者対応能力、法令の知識を高めることができた。	A 令和5年度も引き続き「学びの共同体」に取り組んでいく。神根中学校において4月に行われる講演会に参加予定。6月には、本校で授業研究会を実施し、「学びの共同体」の研究を深める予定である。 B
施設・設備等の管理	○校舎の老朽化により、施設・設備について対応が必要な箇所が散見する。 □通学路が狭く、交通量が多い場所があり、安全確保が課題である。 △教職員の安全に関する意識を高め、危険を察し、行動できるようにすることが求められる。	○校内の計画的な修繕と管理を行う。 □通学路上の安全確保に積極的に取り組む。 △教職員の危機管理意識を高め、学校事故を未然に防ぐ。	○定期的な点検は確実な実施と危険箇所の早期発見・早期対応を行う。 □通学路の安全確保について関係機関と連携して進める。 △日常的に安全を意識し、教職員の危機管理意識を高め、学校事故を未然に防ぐ。	○定期的な点検は確実に行い、危険箇所をを発見したときは、迅速に修繕を行った。 □危険が懸念されていた北川口幼稚園南側通学路がR4年11月9日にスクールゾーンとなり、安全確保が進んだ。 △令和4年度埼玉県学校安全努力学校、川口市学校安全優良校を受賞した。	A 金銭事故を防ぐため、今年度から教材費、学年費の口座振込を始めた。登録率も高く、順調に引き落としができた。6月には、本校で授業研究会を実施し、「学びの共同体」の研究を深める予定である。 B 交通安全事故を防ぐため、今年度から教材費、学年費の口座振込を始めた。登録率も高く、順調に引き落としができた。6月には、本校で授業研究会を実施し、「学びの共同体」の研究を深める予定である。 A

学 校 関 係 者 評 価	
※実施日	令和5年2月15日
学校関係者からの意見・要望・評価等	<ul style="list-style-type: none"> ・学校のみならず、組織の中間層である人々の育成は大変難しいと思われるが、組織で取り組むことが出来ているようで良かった。 ・少し前から若手の教員が増え、頑張っている様子が見られる。どの職場でも若手の教育が課題となっている。 ・良好なコミュニケーションをもって、組織的にも若手の育成、質の向上を図ってほしい。 ・教職員が協力しながら児童の学習、生活に向き合っている。 ・デジタル教科書等の活用で、児童の学習に対する向き合い方に変化が生じ、レベルの高い学習への取り組みがしやすくなっている。 ・ICT端末の活用で教育現場が変化し、児童の取組姿勢が変わってきたのが好ましい。 ・「書くこと」の大切さもなくなってしまう。 ・授業で児童同士が互いの顔を見ながら発言できる環境になったことで、児童自身の自信へとつながると期待できる。互いをよく知ることでのいじめなどが無くなることを期待する。 ・基礎基本の重要性は変わらないと思うが、更なる上の学びは、意欲向上の効果があると思う。 ・PTA、地域の団体などの活動に協力できたこと、HPを毎日のように更新したことはずいぶん嬉しい。 ・150周年の歴史は大変素晴らしい。 ・学校応援団は、微力ながら児童一人一人や先生方の力になりたいと、地道に活動を継続しながら繋げており、これからも継続していきたい。メンバーの確保が大きな課題になっている。 ・150年という歴史の中で、学校関係者及び地域に根付いている基盤を大事にしている。 ・運営協議会は、短時間でもあり、すべてを理解することは難しい。 ・「学びの共同体」の取り組みにより、教職員が児童とともに学び合うことで指導の在り方に変化があると感じた。 ・指導の在り方の変化から、児童と教職員の信頼関係がより深くなり、安心して過ごせる環境になっていることは、大変評価できる。 ・中学校と協同しての取り組みは好ましく思う。小中のギャップをなくす意味でもぜひ進めてほしい。 ・教師の不祥事防止問題は、今後とも真摯に取り組んでほしい。 ・教職員の働き方も、心と体にゆとりが持てるよう取り組んでほしい。 ・樹木が多く、緑豊かでもとてもいい。しかし、樹木は年々背丈が伸びるので定期的な剪定、伐採が必要。高木の枯枝は危険なので点検を要する。 ・車道と歩道の区別がガードレールのみで、通学時間帯、自動車交通量の割には歩道が狭い。通学路の安全確保が必要と感じる。 ・交通整理を町会で行っているが、年々成り手が減少している。 ・コロナ禍での教育現場は苦慮することも多かったことと認識する。各行事等を工夫しながら、また情勢に合わせながら行ったことは大変評価できる。